鉱山の地であった鹿角にはそれにまつわる伝説が多く、なかでも最も栄えた尾去沢鉱山には、次のような話が伝えられている。

光る怪鳥

文明十三年（一四八一）のこと、尾去の村の奥の大森山から光るものが現れて飛びまわり、人を驚かした。昼間見ると羽の長さ十余尋（約二〇メートル）の鳥で、人を取って食わんばかりの勢い。口からは金色の火を吹き、鳴声は牛のほえるようで山々に響き、山が崩れるようであった。人々は恐ろしくて生きた心地もしなかった。

この鳥は夜になると飛びまわって田畑を荒らすので、慈顕院の別当や村人は毎晩一心に神に祈った。あるとき大森山の方から、あの鳥が泣き叫んだり苦しみ悲しがっているような声が聞こえ、それからは飛んで来なくなった。

村人が山へ登ると、赤沢川の水が朱を流したように赤くなっている。さらに行くと黒瀧のところにあの鳥が赤く染まってうつぶせになって死んでいた。頭は大蛇のようで足は牛のごとく、毛には赤と白がまじり所々に金と銀の毛が生えていた。背中と首に四つ五つほど大きな傷があった。腹をさいてみると、胃袋には穀物や草木は何もなく金・銀・銅・鉛の鉱石がつまっていた。

すると村長が、夢に老人が出てきて新しい山を掘れと六回もお告げがあった、これまでどの山のことか分からなかったが、この山のことに違いない、と言った。それで山を掘ってみると金・銀・銅・鉛がたくさん出た。田郡・赤沢・西道など鉱山が出た山一帯は大森山からの分かれなので、まとめて尾去沢とよぶようになった。

またあの鳥はどんな神が退治してくれたのかと探してみると、大森山のふもとに獅子の頭のような石があった。口にあたるところに血がついていたので、これがそうだとしてお堂を建てて祀り、鳥もここへ埋めた。これが大森親山獅子大権現のはじまりだという。